

呼ばれ、「国連機関に行ってみないか？ 返事を明日までにほしい」と、派遣の打診をされたことからである。みなさんの多くは、海外を楽しむためにどんどん出かけられているが、私は、それまでは一度も海外に行ったことはなく、どちらかといえば、多くの人から聞く危険なイメージを持っており、苦手な分野に属していた。また、もともと語学が堪能な訳ではなく、従って、上司からの言葉を聞いた時には、期待よりは、不安の方がずっとずっと大きかった。しかし、家族からの「行ってみれば、なんとかなる」の言葉に促され、翌日、「OK」の返事をした。

不安に満ちたひとりぼっちの夜

私の初めての海外経験は、UNCRDに派遣されて三カ月後に、フィリピン出身の専門家と一緒に、二週間で、フィリピン、シンガポール、マレーシア、タイの四カ国六都市で、国際会議への出席や現地の環境調査をすることであった。

最初の訪問地は、フィリピンのケソンシティであった。初めての海外で目にしたのは、自動小銃を構えたホテルのガードマンである。そんなに危険な所なのかとちよつと不安になった。その夜、一緒に来ていた専門家は少し離れたところにある実家に戻り、ホテルには私一人が取り残された。三五歳にして初めての海外の夜を、私は大きな不安に包まれて過こ

すこととなり、ほとんど眠れなかったことを今でも鮮明に覚えている。しかし、翌日からの国際会議や各地での調査では、つたない英語を使いながらも、いろいろな人々に助けられ、ようやく全日程を終えてからの帰路、飛行機の中から日本の山々が見えた時には、今まで味わったことのない安心感と充実感に満たされていた。

この最初の強烈な経験は、後の多くの困難を乗り越える大きな力となった。

コミュニケーションの大切さ

国際協力と言えば、通常は「国」の仕事である。その国の仕事を地方自治体が行う場合、様々な難しさがあるが、中でもコミュニケーションと利害調整には、大変苦労した。

私の最初の仕事は、北九州市が招かれた一九九四年の英国・マンチェスターでの「グローバル・フォーラム'94」に参



ドイツのコロンピ公園（絵・永吉豊氏）

加することであった。各都市から、市民団体、経済界、労働団体、行政の四分野での代表が参加することになっており、北九州市は、市長など二二名の参加の準備を進めていたが、大きな問題があった。これまで環境問題に積極的に取り組む、北九州市をリードしてきたこれらの人々が、この国際会議で世界中の人々にその経験や思いを伝える具体的な機会（プレゼンテーション）が、会議開催の一月前になっても主催者から何も示されなかったのである。私は何度もファックスや電話（当時はまだ電子メールは無かった）で主催者に確認を続けたが、返事はいつも「今会議の内容をみんな考えている」だった。英国との時差もあって、なかなか事態は進展しなかった。やっと内容が固まったのは、我々が日本を出発する直前（一週間を切っていた）であった。国際会議とはこういうものだ、後になって気づくのであるが、当時は、自分のコミュニケーション能力がこんなにも脆弱なのかと落胆していた。

苦労の甲斐あって、現地に入ってからミッションは順調に進み、会議の後で訪問したドイツでは、ワイン祭りが行われており、一行は昼間の視察が終わってから、ゆつくりとした時間を楽しんだ。利害調整については、事はもっと重大である。いわゆる友好交流では、互に行き来し相互理解や友好を確かめ合うこ

とで、厳しい議論になることがほとんどないだろう。しかし、国際協力では、しばしば強い「交渉能力」が求められる。友好関係の中でスタートした環境国際協力案件であっても、具体的事業実施・資金確保の段階に来ると、相手は、無理だと分かっている「高い要求」をしていくことがしばしばある。それは、こちらが考える「ボランテニアベースの協力だから、そんなことまではできない」というのではなく、北九州市だけでなく多くの国々や国際機関と接触している相手にとってみれば、北九州市の協力も国レベルの援助と同じと受け止められているのである。

国際協力の世界は、表の一見華やかに見える舞台裏で、様々な「交渉」が行われているということは、国も自治体も同じであった。経験の浅い私にとって、このギャップはしばらく頭を悩ませるが、後には、こちらもビジネスベースでの展開を進める良いきっかけになった。

地球の狭さと幸運を実感

最初は迷い苦しみながら進めた環境国際協力の仕事も、いろいろな人との出会いや成功した時の達成感などを通じ、いつしか非常に楽しいものになっていった。中でも、偶然というべきか、運命というべきか、地球の狭さや幸運といったものを幾度か感じたことがある。

その一つは、シンガポールでの事である。ある年、インドネシアでの仕事のためのトランジット（乗り換え）でシンガポールに数時間滞在した際に、街中のエスカレーターで何故か一人の女性と目が合った（相手は上り、私は下り）。そして、すれ違つて振り向いた時に思い出した。それは以前にマレーシアでの国際会議で一週間一緒になって議論したベトナム・ハノイ市の職員だった。私は、下りエスカレーターを降りるとすぐに上りエスカレーターを駆け上がり、そのことを彼女に確認した。彼女は、短期語学研修でシンガポールに滞在しており、もうすぐ母国に帰るところであった。

もう一つは、ニュージーランドでの話である。二〇〇一年にハミルトン市で世界各地の都市が集まつてそれぞれの環境への取組経験を共有し、二一世紀の世界を自治体が引っ張っていくという趣旨で会合が開かれ、北九州市からは私一人が出席した。ハミルトン市は、オークランドから約二二〇km、車で二時間の道のりである。

私は会議で北九州市長のメッセーヂを参加者に伝えたり、夕方には落ち着いた街



オークランド空港で再会記念撮影

中を散策したりと、一人旅の自由なスケジュールを過ごした。会議終了後、私は、主催者が用意してくれた送迎車でオークランド空港に向かった。その車には、私の他、もう一人、参加者の女性に乗っており、延々と続く牧場の風景を眺めながら、会議の感想や母国での活動などを語り合った。そして、車がもうすぐオークランド空港に着こうとしている頃、その女性が、以前、英国で開催され、北九州市も参加した「グローバル・フォーラム'94」の事務局にいたことを知った。その後、彼女とは、さらに、北九州市で再会した。六〇億人以上が暮らすこの地球は、何と狭いことか。

悲しい現実

国際協力の仕事を通じて多くのことを学んだが、中でも「貧困」問題を肌で感じたことは、後の人生観にも大きな影響を与えていると思う。

私は専門家ではないので、多少誤った



ごみの中から有価物を拾う子ども



ブルントラントさん(前列左から2番目)と筆者(後列右)

理解をしているかもしれないが、貧困問題は、農村部における「緑の革命(農業・肥料など農業生産への資金投入)」によって土地無農民を生み出し、これらの人々は働き口を求めて都市部に移入する。しかし、都市部でも十分な雇用吸収力はなく、結果的に多くの貧困層を生み出している。これは一つの例であり、他にも貧困を引き起こす様々な要因があるだろう。

「スカベンジャー(ゴミの中から有価物を掘り出してそれを売る人)」で生きていることが多いようである。不安定な収入だけでなく、病気感染率も格段に高く、心身ともに悲惨な状況にある。世界銀行によれば、世界で約一億人が国際貧困ライン未満(一日一ドル未満)の貧しい生活を送っている。一方で、先進国、或いは、発展途上国の富裕層の生活はどうだろうか。同じ人間でありながら、このような状況に多くの人々が置かれていること、そして、貧困層に生まれた子どもは、なかなかそこから抜け出せない状況にあることを考えると、我々が本当にしなければならぬことは何かが見えてくる。

よく、「持続可能な開発(Sustainable Development)」の言葉を聞く。そして、その意味は、「将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく現在の世代のニーズを満たす開発」とされている。これは、国連の委員会ですらまとめられた報告書で記

述されており、その委員長を務めたのが、グロ・H・ブルントラントさん(元ノルウェーの首相)である。私は、二〇〇六年に、そのブルントラントさんに会った。その時の彼女の言葉は今でも心に刻まれている。「持続可能な開発の目的は貧困の撲滅にある。世界中の人々が平等に幸せになれる権利を持っている。」彼女が、国連の委員長になる時の条件として、半数の委員を途上国から入れることを強く主張したことは、著書にも記されている。

困っている時だからやる

貧困は、その個人だけでなく、社会全体の問題である。社会における二重経済とも言える現実を実感したのは、一九九八年のインドネシアでの暴動の時である。前年にタイで起こった通貨危機は、インドネシアにも広がり、食糧や交通費の大幅な値上げを引き起こし、やが

て暴動にまでなった。富裕層とみなされるデパート等は焼き討ちされ、さらに宗教対立の様相を呈するまでになり、多くの死傷者が出た。五月には、日本人は退去命令により、日本等に引き上げざるを得ない状況であった。

そんな混乱も少し落ち着いてきた七月、私は、スマラン市という中部ジャワ州の街で環境セミナーを開催する準備のためインドネシアに入った。多少収まったとは言いがちでもあちこちで暴動は起きていた。そして、五月暴動の残骸をあちこちで見かけた。その時、私は、この状況ではセミナーは到底無理だと感じた。北九州市から市民の方々にも来ていただくことになっており、危険にさらすわけにはいかないと考えた。私は、状況確認と挨拶を兼ねて、JICA(国際協力事業団、当時)のインドネシア事務所を訪れた。私は、所長に率直に開催への懸念を伝え



(写真上) 長年の恩師・ヨハン・シラス教授(右)
 (写真中) 無事に開催された環境セミナー
 (写真下) インドネシアの人々の笑顔



音楽を楽しむストックホルムの人々

た。すると所長は言った。「今、この国は困っています。明日への光を求めています。私たちは相手が困っているからこそ、何かできることをしたいと思います。」今だから必要なのだとこの言葉は、こちらの都合でできるかできないかではなく、相手にとってどう役立つのかという国際協力の本質を教えてくれた。

また、長年にわたりインドネシアの貧困層の住環境改善に取り組んでこられたスラバヤ工科大学のヨハン・シラス教授は、民衆の置かれている立場や環境改善への強い「希望」を教えてくれた。これらのことは、私たちを、セミナー開催へと導いてくれた。そして、当時北九州市からインドネシア政府へ派遣されていた職員との緊密な連絡により、十分な現地状況の把握とできる限りの危機管理を行いながら開催したセミナーは、スマラン市の皆さんから大きな感謝とともに無事終えることができた。

忘れられない笑顔

国際協力の仕事をしていて良かったと思うのは、やはり、人々の笑顔に出会った時である。中国で、フィリピンで、インドネシアで、いろいろな困難に出くわしながらも、環境が少しずつ良くなっていくことを感じた時、人々の笑顔は、私にとって、何物にも代えがたい嬉しい贈り物である。そんな笑顔の友人がアジア

各国にいて、私は、その人たちのために頑張れる。一〇年ほど前の話になるが、マレーシアのペナン島の農村部で小学校から帰る途中の子どもを見かけた。

その風景は、タイムスリップしたかのようになり、もう三〇年以上も前の私自身の子どもの頃の風景にそっくりであった。なんて懐かしいのだろうか。そして、今その子はどうなっているだろう。この原稿を書きながら、ふとそんなことを思い出した。

二〇〇二年に、スウェーデンのストックホルムに行ったことがある。北九州市の公害問題にいち早く取り組んだ市民リーダーの女性（八四歳、当時）が北九州市を代表して国際会議に出席することとなったため、そのお供であった。北九州市の環境への取組みの発表やノーベル賞受賞者の晩餐会が行われる「ブルーホール」での式典などの公式行事を終え、我々は、空き時間を利用して、街中に出かけた。街角の小さな舞台では、ミニコンサートが開かれ、みんなのんびりと聞き入っていた。運河周辺では、屋外レストランで楽しく食事をする人であふれかえっていた。このゆったりとした時間の流れは何なのだろう。なんて心地よい空気だ。ごく日常の生活の中に、これほどの笑顔、満足感が充満しているこの国は、なんて豊かなのだらうと思った。

「豊かさ」とは、決してあふれる物質では満たされない。スラバヤやストックホルムの人々の笑顔は、生きていることが嬉しく、そしてそれを楽しむ、そんなメッセージを私に送ってくれたように思う。

人と地球の未来のために

今、我々は、地球温暖化など人類の未来を脅かす深刻な問題に直面している。これらの問題を解決しなくては、子どもや孫、そして未来の世代の「笑顔」は見られないだろう。UNCRDに派遣された当時はまだ幼子だったわが二人の子どもたちは今やすっかり大きくなり、妹を加えて仲良くやっている。家族全員がそろっての食事が何より楽しい今日この頃である。

何気ない平凡な日々は、実は、平和で貧困も無いとても大切な時間であると実感している。本当に大切なものは何か、何が人にとって幸せで豊かであるのか。私は、今、UNCRDへの派遣を含め一一年間に及ぶ国際協力の仕事で、私にとって価値観やグローバルな視点など、様々な面で大きな影響をもたらしてくれたことに感謝している。これからの人生をとても充実したものにしてくれそうである。



希望あふれる社会へ